

郊外に 明日はあるか



持続可能な郊外居住をめざして

縮退する郊外はどう生きていくか

若林 幹夫 社会学・早稲田大学教授

WAKABAYASHI Mikio

ハイライフセミナー 郊外に明日はあるか 持続可能な郊外居住をめざして

縮退する郊外はどう生きていく か

若林 幹夫

社会学・早稲田大学教授

1. 「都市を生きる／都市が生きる」とは？

- パーク「都市」(1915)から
- 「むしろ都市は、一種の心の状態、すなわち慣習や伝統の集合体であり、もともとこれらの慣習のなかに息づいており、その伝統とともに受け継がれている組織された態度や感情の集合体である。換言すれば、都市とは、たんなる物的装置や人工的構造物ではない。都市とは、それを構成している人びとの生活過程に関与している。つまり、それは自然の産物であり、自然と関係している。

1. 「都市を生きる／都市が生きる」とは？

- ロバート・E・パーク「都市」(1915)から
- 「この論文の観点からは、都市とは、**たんなる**個々人の集まりでもなければ、社会的施設——街路、建物、電灯、軌道、電話など——の集まりでもなく、**なにかそれ以上のもの**である。また、**たんなる**制度や行政機関——**法廷、病院、学校、警察、その他各種の行政機関**——の集まりでもなく、**なにかそれ以上のもの**である。」

1. 「都市を生きる／都市が生きる」とは？

- パーク「都市」(1915)から
- われわれが通常、都市とみなすものの多く——その憲章、公式組織、建物、市街電車など——は、たんなる人工物であるか、人工物であるかのように見える。しかし、これらのものはそれ自体としては設備であり、外来の装置であって、**それらは、人間が手にする道具のように利用され使いこなされて、諸個人とコミュニティに内在する生きた諸力に結び付け**

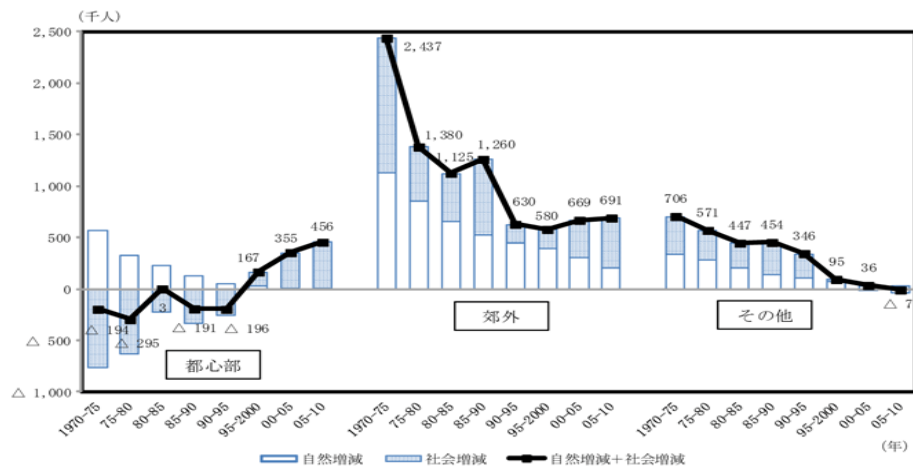
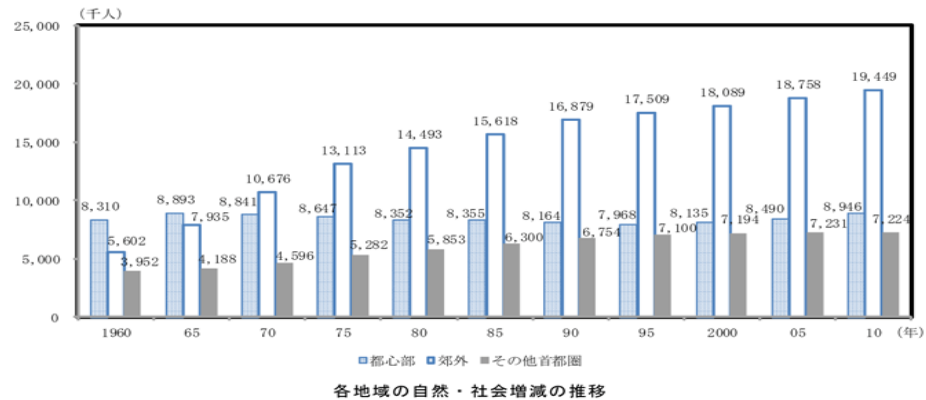
2. 成長から縮退へ

- アーネスト・バージェス「都市の成長」(1925)から
- 「近代社会の顕著な事実は、大都市の成長である。」
- 「都市人口の密度の増大よりもさらにもっと重要なのは、密度の増大と相関して都市から人びとがあふれだし、都市がより広い地域へと拡大し、これらの地域をより大きな共同生活のなかに組み入れるという傾向である。それ

2. 成長から縮退へ

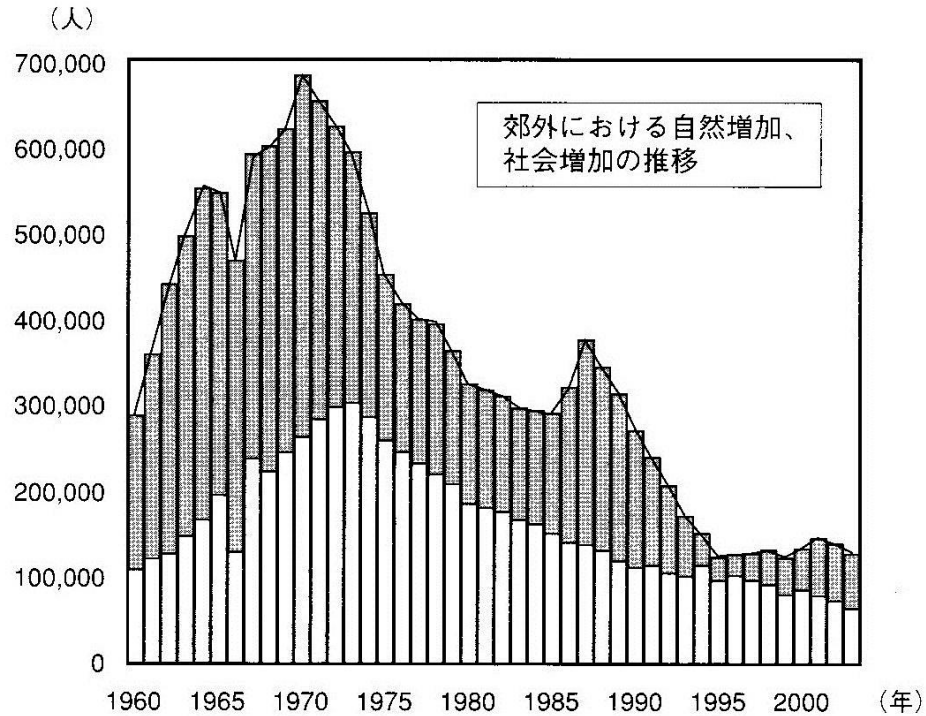
- ルイス・ワース「生活様式としてのアーバニズム」(1938)から
- 「都市の成長と世界の都市化は、近代のもっとも印象的な事実のひとつである。」
- 「都市は即座に創られるものというよりも成長の産物であるから、それが生活様式におよぼす影響は、それまで支配的であった人間結合の様式を完全にいっそうできるはずはないと予想される。」

2. 成長から縮退へ



内閣府『地域の経済 2011』から

2. 成長から縮退へ



資料：人口動態統計(厚生労働省)、人口の動き(東京都)、
住民基本台帳人口移動報告(総務省)

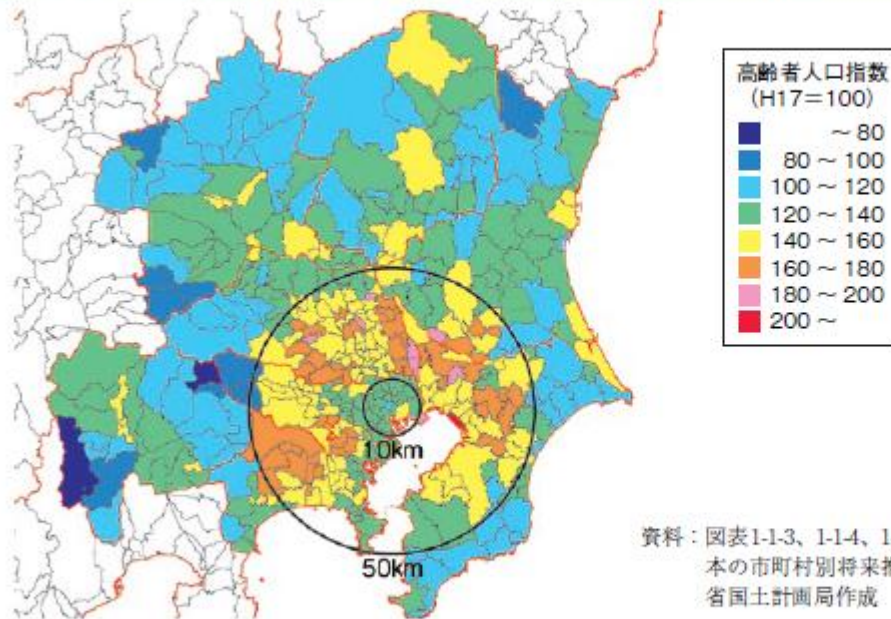
首都圏郊外における人口増加の推移
(江崎雄治『首都圏人口の将来像』専修大学出版局、2006)

2. 成長から縮退へ

- バージェスやワースの言葉を裏返すような時代と社会
- 「近未来の日本の顕著な事実は、都市、とりわけその郊外の縮退である。」
- 「かつて都市から人びとがあふれだし、都市がより広い地域へと拡大し、より大きな共同生活のなかに組み入れられた地域が、いま縮退する時期にさしかかっている。私たちは今、都市と郊外の縮退というあまり知られていない過程を扱わなくてはならない。」
- 「都市、とりわけ郊外の縮退は、近未来の日本

2. 成長から縮退へ

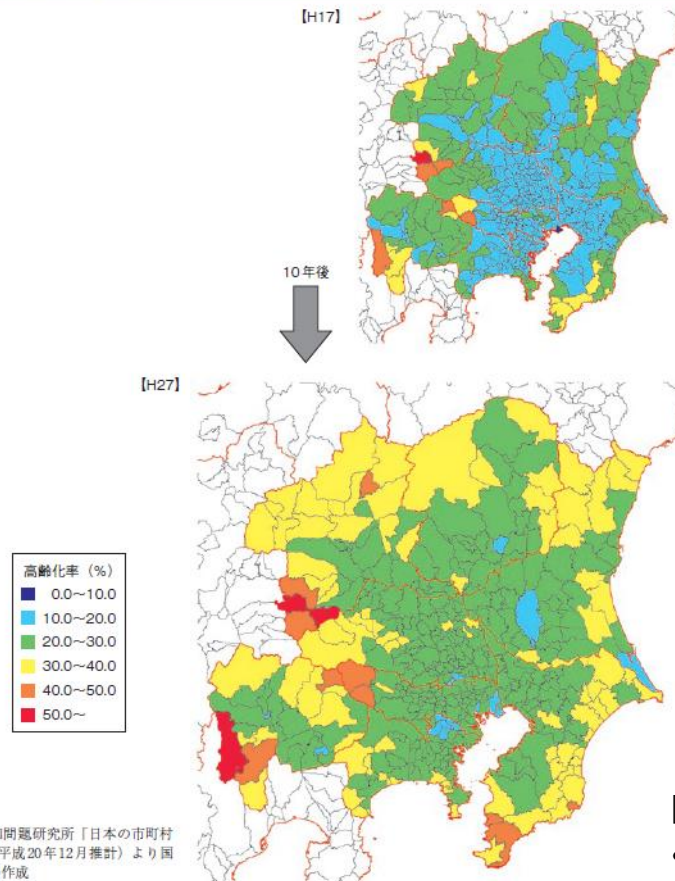
図表 1-1-5 平成27年の高齢者人口指数（平成17年=100）



国土交通省『首都圏白書』平成21年版より

2. 成長から縮退へ

図表 1-1-6 首都圏の高齢化率の変化（平成17年→平成27年）

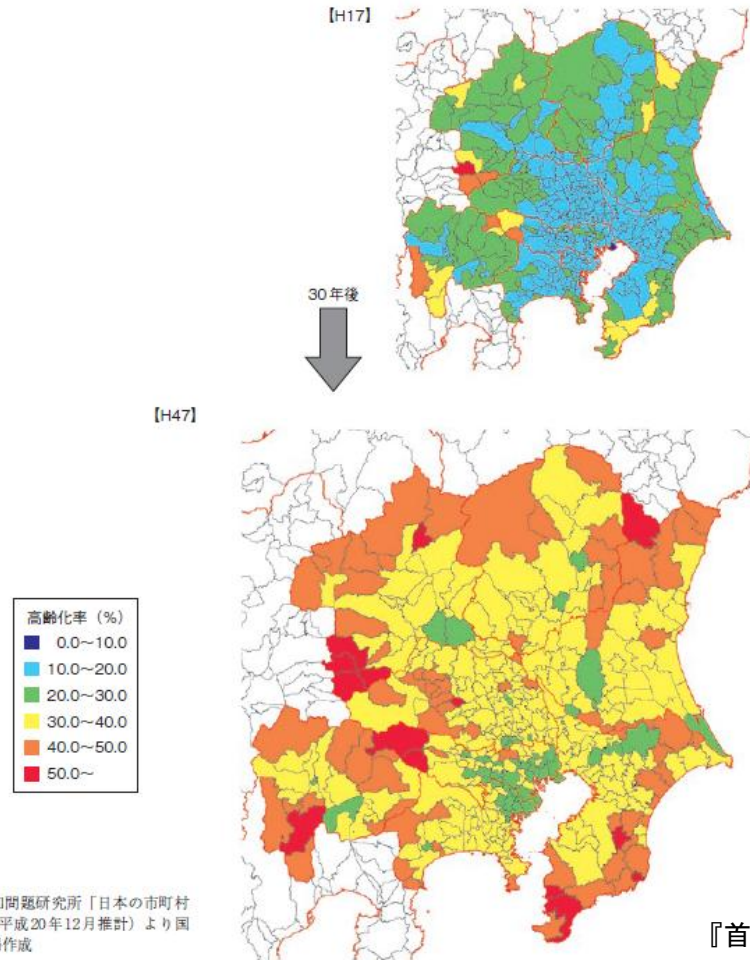


資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の市町村別将来推計人口」（平成20年12月推計）より国土交通省国土計画局作成

『首都圏白書』平成21年版
より

2. 成長から縮退へ

図表 1-1-8 首都圏の高齢化率の変化（平成17年→平成47年）



資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の市町村別将来推計人口」（平成20年12月推計）より国土交通省国土計画局作成

『首都圏白書』平成21年版より

3. 非郊外化と純粹郊外化？

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「都心への通勤・通学による結びつきを、その場所が郊外であることの主要な要件と考えれば、その結びつきがなくなったとき、そこはもはや郊外ではなくなる。」
- 「このとき、都心への交通アクセスの条件が比較的悪い場所に形成された郊外は、通勤・通学による都心との結びつきを失って、非郊外化された地域社会になってゆくだろう...」

3. 非郊外化と純粹郊外化？

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「他方、その場所が郊外であることによって作られてきた生活の形こそがその場所を郊外たらしめ、そうした生活の形を生きることが「郊外を生きること」の本質であるとするならば、それは郊外が新しい局面に入ったのだということになるのだろう。郊外人口が増えるわけではないので「第三次郊外化」とはいえない。だが、現在高齢化しつつある世代が都心に

3. 非郊外化と純粹郊外化？

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「この場合、通勤・通学による結びつきを失って「非郊外化」するとした郊外周縁部もまた、そのなかに生活様式や価値観としての「郊外的なもの」を残し続けるだろう。とすれば、都心と結びついた郊外の周縁に「都心なき郊外」とでもいうべき「純粹郊外」が、持続性や再生産性はもたないかもしれないが出現するかもしれない。住民の高齡化と共に、戦後郊

3. 非郊外化と純粹郊外化？

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「さらにその一方で、たとえばTX沿線の宅地・マンション開発や、千葉市の幕張ベイタウンのような“新しい郊外”が、二〇〇〇年代になっても“古い郊外”の間や外側に作り出されつつある。」
- 「こうした「新しい郊外」の生産を考えれば、その分厚い膨らみのなかのいまだ郊外化されていない場所に新たな郊外が生産されることにより、郊外は縮小しつつも再生産されて

4. 「生きた郊外」から考える

- 重松清『定年ゴジラ』から
- 「この街の名前は、くぬぎ台という。宅地造成が始まる以前は付近一帯が雑木林だったことに由来する。いまも住宅地を少し離れれば昔ながらの自然が残っている。二十数年かけても、街の規模はほとんど広がらなかった。バブル景気の頃にはくぬぎ台の地価もそれなりに上がり、ということは都心に近い住宅地の地価はもっとあがり、もう少し好況が続いていけば周辺にマンションが建ち並ぶ風景を目にすることもできたが、残念ながら都

4. 「生きた郊外」から考える

- 重松清『定年ゴジラ』から
- 「要するに、どこのニュータウンも、開発の時点ではベストを尽くしているんです。」
- 「ただ、それはあくまでも開発の時点の社会状況や価値観にもとづいたベストなんです。五年で街をつくり変えられるんなら、ずっとベストを保てます。でも、街ってというのはそんなものじゃない。住民だって歳をとる。エレベーターのない古い団地が、いまどんどんゴーストタ

4. 「生きた郊外」から考える

- 重松清『定年ゴジラ』から
- 「数字を読み上げる学生のを聞いていると、なんとも言えず嫌な気分になった。宮田助教授の持つ地図が、がさがさと音を立てる。その音も、耳に触る。」
- 「数字だけで、なにがわかる。地図を眺めるとするのは、要するに高見から見下ろすということではないか。」

4. 「生きた郊外」から考える

- 重松清『定年ゴジラ』から
- 「生身の人間が生きとるんや、そこんとこ忘れなや！」
- 「「でもね」山崎さんは言った。「革靴のつま先に染みる雪の冷たさや、そんな日に終電で帰って風呂に入ったときの、うーん、っていう気持ちは、君らがどんなに調べてもわからないよ」」

5. 郊外はどう生きていくか

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「郊外とは“たまたま住んでいる”偶発的な居住地だ。だが、土地や家はそれをもったとたんに“たまたま”と言い切ることのできない重さと慣性をもつ。ここにもまた、郊外を生きることの両義性がある。しかもどの場所に立つどんな家に住み、そこでどんなライフスタイルと共にある生活をしてゆくのかは、職場、所得、購入する家や庭の形態、市場で実際に

5. 郊外はどう生きていくか

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「戦前期の「自然と文化あふれる郊外」というイメージも、戦後の「団地ライフ」への憧れも、それまでそこにあった近郊の地域社会をいったんは“何物でもない場所”へと還元したうえで作られる郊外の商品性とブランド性を示していた。」
- 「住居やライフスタイルまで商品として購入されるこの社会では、住み続けることによる結びつきよりも、住宅市場やマスメディアのなかでの「素敵なイメージ」の方が、ときに身近で重要なもの

5. 郊外はどう生きていくか

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「そうした郊外のあり方に対し、記憶の共有と継承、郊外内部の地域の相互理解や連帯を説く人もいる。郊外生活者の選択として、そうした記憶の共有と継承や、地域間の相互理解の促進というのはいりうるだろうし、一定の意味はあるとは思ふ。だがしかし、そうした共有や継承を容易に生み出さない時間性や歴史性と、並存するさまざまな場所をみることな

5. 郊外はどう生きていくか

- 若林幹夫『郊外の社会学』から
- 「そのことを見ることなく、ただ共有や継承や相互理解を説くことは、郊外という場所を生きる人びとの生の形と決定的にすれ違ってしまいうだろう。逆にいえば、そのことを出発点としたときのみ、歴史や記憶の共有や継承、地域や住民の相互理解の試みはリアルなものになる。」
- 「かつてそこにあったものも、そこで起こり、生きられたことも“忘れゆく場所”であること。互いに互いを見ない場所や人びとの集まりや連なりであること。そこに郊外という場所と社会を限界づ

END